

京都大学構内遺跡調査研究年報 2014年度

第1章 2014年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章 京都大学吉田南構内A M21区の発掘調査

第3章 京都大学北部構内B F 32区の発掘調査

第4章 京都大学本部構内A U 27区の発掘調査

第5章 京都大学本部構内A T 22区の発掘調査

第 1 章 2014年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉川真司 千葉 豊 富井 眞

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2014年度には、以下のように発掘調査 2 件、立合調査 6 件、資料整理 5 件を実施した（括弧内は図版 1 および表 2 の地点番号）。

発掘調査	医薬総合研究棟新営工事（病院西構内 A I 15区）	（整理中，図版 1－427）
	国際人材総合教育棟新営（吉田南構内 A P 23区）	（整理中，図版 1－428）
立合調査	生活習慣病予防研究センター（病院西構内 A G 10区）	（第 1 章，図版 1－429）
	医学部構内駐輪場整備工事（医学部構内 A Q 18区）	（第 1 章，図版 1－430）
	安全対策工事（北部構内 B C 29区）	（第 1 章，図版 1－431）
	外灯設備工事（北部構内 B A 29区）	（第 1 章，図版 1－432）
	外灯設備工事（吉田南構内 A P 25区）	（第 1 章，図版 1－433）
	外灯設備工事（病院西構内 A J 13区）	（第 1 章，図版 1－434）
資料整理	学生寄宿舍吉田寮新棟新営（吉田南構内 A M 21区）	（第 2 章，図版 1－399）
	学生集会所新営（吉田南構内 A M 21区）	（第 2 章，図版 1－401）
	自家発電設備新営（北部構内 B F 32区）	（第 3 章，図版 1－402）
	自家発電設備新営（本部構内 A T 22区）	（第 5 章，図版 1－403）
	国際イノベーション拠点施設新営（本部構内 A U 27区）	（第 4 章，図版 1－404）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、2014年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、吉田南構内 A M 21区、北部構内 B F 32区、本部構内 A U 27区、本部構内 A T 22区の発掘調査については、それぞれ第 2 章～第 5 章で、調査成果を詳述しているので参照されたい。

吉田南構内 A M 21区 本調査地点は、吉田南構内の西南隅に位置し、吉田二本松町遺跡に含まれる。古代では、奈良時代の井戸や溝、平安時代の溝などが検出された。中近世では、調査区西側には土取穴が展開するが、中央から東側では、布掘り基礎の建物跡の検出と所謂「乙訓在地形土師器」の大量出土が特筆される。また、中世後半までは土地区画

として機能した南北方向および東西方向の2本の大溝では、堆積断面で中世の地震に伴う砂脈なども確認された。

北部構内B F 32区 本調査地点は、北部構内のほぼ中央に位置し、北白川追分町遺跡に含まれる。縄文時代の地形環境に関する層位データが得られ、隣接地点で確認されていた縄文中期末の住居が、北東から南西にかけて張り出していた微高地上で、崖状に落ち込む南東方向の低地部をのぞむ部分に立地していたことが明らかになった。そしてこの崖面は、土壌の放射性炭素年代測定や含有火山灰によって、縄文時代前期以前に形成されていたこともわかった。

本部構内A U 27区 本調査地点は、本部構内の東南辺に位置し、吉田本町遺跡に含まれる。4つの調査区からなるがいずれも攪乱が著しい。歴史時代のおもだった遺構としては、西のA区で検出された南北にはしる中世前半期と思われる道と、東のC・D区で検出された中世後半期に白色砂を採取した砂取り穴がある。この白色砂は、下位に、包含されていた木炭の放射性炭素年代から縄文時代草創期頃と思われる、北へ緩やかに下がる微高地の緩斜面および微高地上の平坦部を形成する土壌化層が確認されたので、縄文時代の水成堆積物であることがわかった。

本部構内A T 22区 本調査地点は、本部構内の西南隅に位置し、吉田本町遺跡に含まれる。中世の遺構としては、白川道とその南側の石組みの井戸が検出され、13世紀には同時存在していたことがわかった。白川道は、近世にはその井戸を覆うように南側に移っていったが、幕末には尾張藩吉田屋敷の施設に関わると思われる東西溝に切られる。この吉田屋敷については、文献記録の検討から、尾張藩邸として十分な機能を果たすようになったのは元治元年（1864）以降であろうと推測された。